

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特許回覧物承認証第六七七号  
令和二年三月一日発行 第四百二十三巻 第三号

# ホトトギス

三月号



## 風雅の小筥〔二十六〕

廣太郎

二十年以上前になるだろうか、ある地方の市民俳句大会に出席した時の事、その大会には色々な結社の方が出席されて、選者も伝統俳句系や現代俳句系様々な方がおられたが、その現代俳句系の方は俳句の持論として、御自身や弟子達には、出来るだけ人の使わない言葉を使うように指導されているというのだ。これは取りも直さず一般的な言葉を使うと類句に陥り易いという事をおっしゃっていたと記憶している。

実は先日ある俳誌の祝賀会に出席して、短い講話をさせて頂いた。そのレジュメには正岡子規の句をいくつか紹介して、それについての話が主であったが、当日別に引き出物の一つとして、高濱虚子の句がある方が解説した本もあり、又その祝賀会にあたって会員の皆様からの募集句の入選句集も出席者全員に用意されていた。たまたま私のテーブルの隣に座っておられた方が、一般の招待客でその方は俳句を嗜まれない方であった。それでもその方は虚子の句が書かれた本に目を通され、私の話にも熱心に聞き入っておられ、祝賀会で歓談の最中私にこんな感想を述べられた。

「今日拝見した句で、正岡子規や高濱虚子の句は一度読んだだけで意味がとて判り易いのですが、募集句入選句の多くは難しく判りません」という意味であった。その御意見をお聞きして、ふと冒頭の俳句大会での言葉を思い出した。ひよっとして我々も無意識のうちに言葉に凝り過ぎて難しい、又一般的には判り難い言葉を使ってしまうのではないだろうか。あらためて平明で余韻ある句を考えてみたい。

旬日記 汀子

平成三十一年三月二日 芦屋ホトトギス会

飾り置く雛に開放されし館  
確か今帰雁の声と気のつきし  
啓蟄の庭を通りて来し客も

三月三日 下萌旬会

その辺の片付け終へて雛の間に  
句の縁加はる仲間雛の日に  
これよりの日々の変幻あたたかし  
雛飾り終へて客間となりけり

三月四日 ロイヤル俳壇

春めくと思ひし昨日遠ざけて  
一雨の誘ふ春めく心かな  
牡丹の芽大小勢ひありけり  
白酒を酌みて女の集ひかな  
菖外し牡丹の芽立促せる

三月八日 工業倶楽部

飾り来し雛に又今日外出して  
東風吹くや富士くつきりと空の旅  
女客華やや桃の節句かな  
春めくと思へば旅路くつろぎて

三月九日 関東ホトトギス俳句大会前日旬会

これ以上快晴のなき春の旅  
城跡の歴史を問ふも春らしく  
三月十日 関東ホトトギス俳句大会

旅の朝始まる一歩梅日和  
快晴の空持ち越してあたたかし

三月十日 関東ホトトギス同人会

植物園春めくものに囲まるる  
植物園春めくものに立ちて春浅し

三月十二日 大阪倶楽部

上京や春めく心携へて  
春の虹見たる話題の中にある日よ  
大輪を約束したる牡丹の芽  
訃報聞く春めく心あともどり  
地虫出づ忽ち所在なかりけり  
旬の世界携へ東風の黄泉路へと

三月十二日 綿業倶楽部  
暖かと思ひし油断ありにけり  
心地よく旅立つ朝暖かし

三月十四日 清交社  
水温む又旅多き日々となる  
木々芽吹く朝の空気の中にある  
水温みたるに命の惜しまるる  
災害の話に及ぶ木の芽頃

朝より込み合ふ予定水温む  
なつかしき黄沙曇の旅のこと  
み吉野の桜の芽立問ふことも

三月十五日 アネモネ旬会  
春眠を払ひ早出となりしかな  
春眠の消えてうつつの文化賞  
蝶飛んで空の広さに気づきけり  
雛飾る心客待つ心かな

祝はるる今日の話題の春らしく  
三月十八日 アサヒカルチャー  
春寒を心地よしとも出掛け来し  
これよりの春めく日々を心して  
贈られし花にやすらぐ春の日に

三月十九日 有恒俳句会  
雛に置く心は飾りたるよりは  
麗かに健康を取り戻しなれる  
雨降りに木々の芽吹をいざなへる  
花の旅近づき準備はじまりし

うかうかと過ぎゆく日々を麗かに

啓蟄や雨の一日となりけり  
木の芽晴雨の一日もその中に  
三月十九日 無名会

暖かや出掛ける用意ととのへて  
山笑ふ昨日も今日も似し日和  
暖かきゆ糸の油断と思ひけり  
遠くより近づいて来し山笑ふ  
山笑ふ頂の雲もう消えて  
暖かき雨とははならぬ朝かな

三月二十日 夏潮旬会  
祝ぎ心とは春らしく弾みつつ  
明日は又雨と聞きつつ花仰ぐ  
初花と思ふ間もなくほどけ来し  
病む友に花の消息届け来し

さつと影過ぎたる燕ひるがへる  
又花の遅速に心置く日日に  
三月二十三日 旬会と講演の会  
健康に勝るものなし暖かし

旅予定花の遅速にかかはらず  
暖かき昨日が遠くなる目覚  
花の旅近づくまでの予定混み  
何色の薔薇の花芽と問ふことも

三月二十八日 きさらぎ会  
身ほとりに目刺を焼きし名残あり  
踏み込めば何かが咲いて春の野よ  
春の野を抜ける近道とはならず

三月二十九日 時雨旬会  
一日の日の旅路尽くるなく  
木々芽吹きたちまちま動き出す  
春めくと思ひし昨日あともどり

幾度も日永の空を見上げし日  
春めきていつか健康取り戻す  
早起きをいつか健康の使ひ方  
木の芽より庭師の手入れはじまりし

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成三十一年三月二日 芦屋ホトトギス会

蘆の角つんと宇宙を引き寄せて

蟻穴を出でてのり子と目が合ひぬ

曲水の宴句やかに煽やかに

三月三日 野分会音屋例会

初雷に館の暦日刻みゆく

芽柳やみの字糸の字を風に書き

三月三日 青嵐会音屋例会

蛇穴を出でてあなたを恐れけり

蛇穴を出て虚子館の主となる

蛇穴を出て初恋をしてをりぬ

三月六日 カトリック新聞選者吟

口ザリ才を繰る梅が香を弾きつつ

三月七日 蕉心会

春霖に水面緩んでをりにけり

平心の記憶を苞に鳥帰る

蕉心会雨の特異日水温む

あれほどの紐やつたのに蝌蚪皆無

落椿水に抱かれ未来へと

春雨の止んで街騒戻り来る

雨上がる囁を呼び覚ましつつ

如月の空に包まれ飛べるもの

三月九日 関東ホトトギス同人会 大会

天守閣無く石垣の無く長閑

城といふ歴史背負ひて地虫出づ

蟻穴を出て戦無き城址かな

菖蒲の芽流れに色を足してゆく

姥が池謂れ悲しく水温む

佳人とは転ぶ姿もうららかに  
梅が香を道連れにして虚子句碑へ  
苔むして梅は古語らざる

三月十一日 朝日カルチャー若草句会

春泥も歴史の一部なる城址

恋文の虚しく置かれ春炬燵

春泥や命育むものとして

地震の地に一粒の星蒲公英

春炬燵思考蕩けてゆきにけり

踏まれても見つめられても蒲公英

三月十四日 土筆会

蟻の道未来掴んでをりにけり

涅槃西風スカイットルを研ぎ澄ます

外つ国へ宇宙への旅蟻の道

三月十五日 北國文芸選者吟

朝霞より目覚めゆく都心かな

三月十五日 廣邦会

百余年歴史背負ひて卒業す

遠霞暴かれてゆく君の過去

本山の目覚めは早し鐘霞む

三月十六日 ホトトギス社吟行会

蒼天を誘ひ出したる朝霞

あの事件忘れたやうに宮長閑

ものの芽に大樹の未来彩られ

下萌に始まる造化神の杜

三月二十日 登高会

芋の葉に日輪淡く被さり来

種芋のごろんと土間の主役かな

菜飯炊く野の香厨に広げつつ

種芋に畑の未来託しけり

三月二十二日 前議員句会

臘月都市の休日見下して

蒲公英の踏まれる毎に色を足す  
苗木市宮司好みの鉢並べ

三月二十三日 ホトトギス社句会

暖かき目差し集め受賞かな

明日の色風が染め上げ茨の芽

暖かくイチョロイ選手引退す

三月二十四日 青嵐会東京例会

初花に古刹の歴史重ねゆく

春光を纏ひ少年鳩を追ふ

いぬふぐり目立たぬ丈に目立つ色

三月二十四日 野分会東京例会

三極の花の香に風迷走す

初雷に頁を捲る農暦

初雷や蠢くものを押し出して

芽柳を潜れば観世能楽堂

初雷や富士山噴火近きとや

三月二十六日 若水句会

駆引きを楽しむ主婦や苗木市

木の芽風サラリーマンの屋舳時

苗木市襦袢市境内の人出

玉椿地に還りゆく気品かな

椿草くことに明けゆく忌日寺

天国を見てきたやうな落椿

三月二十七日 目黒学園句会

春泥の靴の舞く忌日寺

断崖といふ董野の一詩人

董野に佇てば偲べる一詩人

董咲く歌劇の街の賑はひに

穂の芽に山の生活の頁繰る

春泥を避け来る猫の器量かな

三月二十八日 静の会

卒業やつひに告白出来ぬ君

# 雑詠

## 廣太郎 選

兆てふ空とのあはひ薄紅葉 香川 湯川 雅  
 野の風の波かたどりぬ芒原 同  
 水澄むや水にもありぬ裏表 同  
 思草思ひ焦れてやつれしか 相模原 木村 享史  
 一書読み終へて新幹線夜長 同  
 夜学たのし老を忘れて励むのも 同  
 父の亡きあとの故里山眠る 神戸 千原 叡子  
 風呂吹のゆきわたりたる根来椀 同  
 尼様の今も差配の大根漬 同  
 天災の多かりし秋見送りぬ 東京 今井千鶴子  
 ゆつくりと花野の道を湖へ 同  
 かつて我住みし箱根も台風禍 同  
 虫の闇とぎれしところ海なりし 熱海 嶋田 一步  
 虫時雨とははたと消えはたと来る 同  
 鉦叩明日あることを信じさせ 同  
 秋霖や指に食ひ込む旅靴 渋川 木暮陶句郎  
 みちのくの訛溶け込む温め酒 同  
 錦木の紅葉に雨といふ旅情 同

三山も五山も紅葉山となる 神戸 和田華凜  
 火の国に裂ける通草の白さかな 同  
 定型を崩さぬ鶴の舞姿 同  
 金曜の夜の新宿熊手市 東京 田丸千種  
 熊手選る笑ふ阿亀に見下ろされ 同  
 一夜城築く高張西の市 同  
 晴れわたるこころ魚沼刈田原 長岡 安原 葉  
 この旅の締めの子規忌として侍る 同  
 句梵鐘無事を報告年尾の忌 同  
 畦道でつながる隣家柿の秋 龍ヶ崎 今橋真理子  
 木洩れ日の降りこぼしたる木の実かな 同  
 雨の景より現はれし初紅葉 同  
 遠き山より秋のこゑ神のこゑ 熊本 岩岡中正  
 秋彼岸過ぎたる山の高さかな 同  
 秋風の指す一本の道を行く 同  
 町の名に残る寺の名菊日和 奈良 古賀しづれ  
 蒼天に天辺預け銀杏散る 同  
 大仏の空深深と銀杏散る 同  
 迷ひなきかたち枯梗開きけり 神戸 山田佳乃  
 襟の先まで几帳面白桔梗 同  
 虫の声重なり合うて沈む闇 同  
 朝寒や目元まで夜具引き上げて 袋井 湖東紀子  
 鯖鮎に手を切るやうな流れかな 同  
 秋晴の下に実りの時来たる 同

# 雑詠句評（二月号より）

秋草に日差し揺るる日夫葬る 岡山伴 明子

「葬る」は、茶毘に付するのではなく、墓所に納骨するということであるかと思う。墓所の周辺の秋草が、好天の日差のもとで、さわやかな風にゆれている。納骨の日として、まことにこの上ない秋日和。作者はそのことに満足感を覚えると同時に、印象的な一日として記憶されたのであろう。（公次）

長年連れ添った配偶者との別れはこの上も無い悲しみである。又その思いを俳句に託して詠むという事もなかなか辛いのではないだろうか。敢えて言うならば季節に自身の感情を託すというのが俳句の信条であるならば、そこに魂が宿り、神が寄り添って下さるのではないかと思う。（廣太郎）

その中に息を殺して吾亦紅 渡川 木暮陶句郎

花野に足を踏み入れると萩、尾花、女郎花などすぐに目に付く草花に混じって吾亦紅は隠れてでもいるようにひっそりとしている。ともすると、視界に入っても誰かに教えられるまで気づかないことがある。作者は吾亦紅になりきるまでじつと見入っていたのであろう。限りなく吾亦紅に近づいて行つたとき、吾亦紅自身が誰にも見つかからないように「息を殺して」いるのではないかと思いつたのである。

最初に「その中に」と花野全体を掴み取ったことで後の吾亦紅がよりクローズアップされ、中七で吾亦紅の持っている特質を端的に表されている。実感の一句と思う。（しげ人）

その花の形や色のユニークさ故に古今素晴らしい句が詠まれてきた吾亦紅であるが、結構虚子の句はそのユニークさの最右翼だろう。しかしこの句も負けず劣らず生き生きと花の咲いている様子を巧みに捉えている。花野などに他の花に混じって咲いている様子が楽しく表現されている。（廣太郎）

天地有情

一木となるまで佇ちて露けしや 熊本 岩岡中正  
 末席の遅刻の夜学子をとがめず 同  
 牡丹の今崩れんとする気品 東京 稲畑廣太郎  
 古茶啜りワイン談議の二人かな 同  
 快晴の園や人来る小鳥来る 長岡 安原 葉  
 虚子塔へ向ふ人等や小鳥来る 同  
 冬はそこ秋らしき日もなきまゝに 東京 今井千鶴子  
 冬好きと言ひぬし母よ遙かなる 同  
 紅葉して山の呼吸の深くなる 神戸 和田華凜  
 人はみな旅の途中よ翁の忌 同  
 残暑これしきと己に言ひ聞かせ 相模原 木村享史  
 旅一と日花野に雲と遊びたる 同  
 七曜を学ぶ俳諧文化の日 宇治 西村やすし  
 晩年を俳句極楽文化の日 同  
 オカリナの音さえざえと城の秋 仙台 赤川誓城  
 ひとつもの野路菊おかれ馬の墓 同  
 鷹狩の獲物賜ひぬ杞陽師に 神戸 千原叡子  
 鷹渡る大空の道士佐も沖 同

山寺へ踏み分けて来し露葎 同 三村純也  
 川音に近きものより紅葉して 同  
 煩惱の九十七てふ汗なりし 福山 竹下陶子  
 勝独楽の回り澄みたる孤独かな 同  
 秋一と日水族館の客となる 東京 河野昭彦  
 アシカショー子らの喚声秋日和 同  
 ふるさとの山は噴火し台風も 同 大久保白村  
 銀漢の尾に手がとどく草千里 同  
 名水といふ流れあり蕎麦の花 熱海 嶋田一步  
 山裾といへる広さに蕎麦の花 同  
 二日目の会や浪花の天高し 西宮 本郷桂子  
 月今宵商都のビルを統べてをり 同  
 ゆく秋や又も見直す覚書 芦屋 黒川悦子  
 行秋の東京湾の空青し 同  
 苑広し行くさきざきの小鳥かな 東京 山田閨子  
 亡き父の丹精の庭小鳥来る 同  
 水漬きたるものひとつに今年米 龍ヶ崎 今橋真理子  
 これよりの川安かれと秋惜む 同

心子選